

圖にも録せられた。大正十年刊川上孤山氏の妙心寺史下巻の所記は此の拙稿本文に引いておいた如く見逃がしてはならぬ。傳來に關する傍證としては、前述の如く、明治四十四年講大正四年刊安土桃山時代史論中の村上直次郎氏の安土桃山時代の基督敎を題する一文を參考する要がある。終に臨んで川上孤山師がこの有益

西歐羅巴の史的生活に於ける週期律

エー・フオゲール原著

文學士 菅原 憲 抄譯

なる新資料を私に提供され又種々示教される事のあつた好意を深謝する。

(附記) 大正十一年十一月刊行橋川正氏編輯の京都府葛野郡史概要に春光院所藏文書を載せて略説する所あるを知りたれば茲に註記す。(大正十四年九月八日追記)

この一文はHistorische Zeitschrift 129 Band, I Heft(1923)所載W. Vogelの「Über den Rhythmus im geschichtl. Leben d. abendländischen Europa」を題する可なり長い論文の大意を譯出したものである。原文は四章に分れ、第一章は序論として本文を草するに至つた事情、主としてスパンゲンベルグの所説に反對の意見を述べ、

第二章は歴史には三百年毎に週期のあることを論じ之を基礎とした新しい時代區分法を唱へ、第三章では紀元後八世紀以後西歐羅巴の歴史に週期の存在するこゝを立證し、第四章では普通の所謂古代にも同様の週期のあつたこゝを述べ、最後にこの週期律に基づいて區分した時代の名稱を擧げてゐる。本譯文

では原文の全部を採ることが出来なかつたから第二章の全部と第四章の後半部だけを譯出することにせよ、また章を分けずに續けて記載することにした。

従來の時代區分法、即ち古代中世近世と分つことは全く形式的であつて實際上屢々無理を生ずることはいふまでもない、しかしこの區分法が尙一般に行はれてるのは因襲久しきに互ると共にまた之に代るべきよりよき原則的方法がないからである。一般に(西歐羅巴の文化圏だけでも)通用する所の人生哲學及歴史哲學或は世界觀、即ち新しい區分法に根據を與へるものは認識論を基礎とする哲學者の論争はともかく少くとも差し當り存在しない。自然科学は新しい光明を與へる源泉として珍重され、殊に西歐羅巴の實證哲學はこの意味で之を利用してるが尙其の深刻な哲學的論證の爲に論争が絶えない。そこでは人類は古い暗黒な時代、略々第三紀層と沖積層の交に出現し不可知の

將來不可知の目的に到着するものと斷念しなければならぬ、先史時代の研究によつて吾々は從來の方法とは異なつた非常に長い期間の人類の發展を調査する必要を生じ、狹義の歴史即ち記錄に依る過去六―七千年間の歴史は單に最近の短期間を示すに過ぎない。先史時代研究者の區分法、即ち古石器時代、新石器時代、青銅時代、鐵器時代などいふのは便利な年代的順序を遂つた方本ではある、但遺物はないけれども傳説的に傳つてゐる歴史的事實をも先史時代(青銅時代、鐵器時代、或は更に新石器時代)に入れてしまふといふ弊は暫く措いても尙内部的精神的區分の價值がない。だから歴史家には何の役にも立たぬ。例へば鐵器時代は歐羅巴では過去三千年を包括する。かやうなものを標準とするのは丁度、精密な定量測定にリットル秤や臺所用の天秤を用いる様なものであらう。歴史の區分法を外界の影響に於て見出さうとす

る大膽な試みも少くない、氣候の變動の如きは其の適例である。不確實な或は物好きな素人の證明はいふまでもなく歴史家が自分の科學に外來要素の闖入するのを拒むのは理の當然であつて、もし確實有理な區分法を見出さうとするならばそれは歴史其のものうちに探求すべきである。但歴史と關係の深い他の科學の範圍から刺戟をうけ之を利用することをも排斥しようといふのではない。

史學は人類生活の科學である、時の経過に於ける社會的集團の生活即ち民族、階級、宗教團體等の科學である。生活の科學、生活現象の系統的觀察換言すれば生物學が史的生活、民族生活の上に應用されて多くの解釋を與へるやうなことはないか歴史に縁の近い科學、例へば政治學が生物學の原則、及生物學的觀察法に則つて著しい進歩を來してゐる、(例へば Kjellén や O. Spenn の研究) 先第一に吾々は人類團體、殊に國家を身體的にも精神的

にも組織されてる生體、統一ある生活體として考察すべきや否やが問題である、この觀察はまだ一般には行はれてないがしかし近來信用しうる生物學者側から國家生體觀が唱へられてるのは注目(註一)に値する。

生體の生活に關する用語を歴史の方面に用いることは昔から珍らしくない、國家又は團體の出生、罹病、衰弱、國民及國家の年齢、ボスボルス(病)人、青春時代、或は實に生體といふ言葉さへも古來用いられてゐる。しかし之等は皆單に誇張して文飾として用いられたに過ぎない、今もし之等に實質的意義を持たせるならばこゝに新味を與へるものといつていゝ。但この場合には慎重に史的経過と人類全體又は一部團體の生活作用と見做した上でのことではなければならぬ。

新しい歴史哲學も生物學の刺戟を受け、近來歴史哲學の方面で用いる週期律の概念も生物學から

來てゐる。予の見るところではこの週期律なるものは史上の經過に於て認めらるゝ多少規則的な運動、波形をつくつて異なる時代、異なる國土に於

て同様に反覆するある現象の連続的なものと解せられてゐるやうだ、從て自然科学に於ける週期律なる言葉は吾々の表現せんとする意味を適切に盡しては居ない。生物學でいふ週期律はある現象例へば運動の精確な時間的間隔に於て連続的の反覆を意味するから、心臓收縮の週期、年々の落葉の週期などといふ、生物學は近來其の本來の意義に於ける週期律に注意を拂ふやうになつた。予は信ずる、最嚴密な意義に於ける週期的經過が大なる史的集合體(予は之を文化圏といふ)に於ても證明されるものであつて之が時代區分の基礎とならねばならぬものであると、この事實は予にあつては全く經驗的觀察から出發してゐる。勿論同様の觀察は古來行はれては居つたが、只從來何人も之に

深き基礎を與へようと思せず、また週期の構造を解剖しようともしなかつたのである。

予は先簡單にこの觀察を述べる。

多くの時代が其の以前か以後かの時代と相酷似することは珍らしくない。最手近な例は十九世紀と十六世紀とである。兩者共に精神上技術上大變動の時代、深刻な社會的鬭争の時代、殊に地球上到る所に歐羅巴民族は未曾有の發展を遂げた時代である。近世は十六世紀の發見旅行を以て初まり、そして次の數世紀を通じて其の開始された路程を續行し結局十九世紀の植民的擴張に到達する、之で無意識にある循環が完成したやうに感せられる。十九世紀と十六世紀は單に外部的にのみならず内部的にも時代の特徴として相類するものがあるがこれは暫く措き、更に古きに遡ると十三世紀十六世紀の類似に想ひ當る。そして同時に近世は十六世紀からといふよりも却て十三世紀に初まると考

へられる、何故ならば近世を十六世紀からとする事情は既に十三世紀にも現はれてるからである。

民族的個人主義の成立、宗教の鬭争（アルピゲンゼス）自然科学的研究（アルバーツ・マグヌス）技術の變動、戦術の改造、地理的發見（マルコポーロ）美術の發達（チマブエ、デオット）國語の發展等孰れも十三世紀の所産である。就中十三世紀も亦歐羅巴の民族的勢力擴張の時代であつて獨逸人の北東方植民、伊太利人の商業上レバントに侵入する、佛蘭西人の國家制度の完成等十六世紀の發見旅行、十九世紀の植民的發展と其の廣袤に於ても重要さに於ても正しく比肩すべきものである。

この經驗的に見出さるゝ特色ある三個の世紀は其の類似點に於いて特に時間的間隔が注目を惹く故に吾々は知らず／＼三百年毎に史的^{ヒストリシヨン}生活の循環することを推定するやうになる、或は九世代毎に人類の文化圏の史的^{ヒストリシヨン}生活は一つの週期的循環を完

成するといつてもいい。

この觀察法は前述の通り新奇のものではなく、オトカール・ローレンツも同様の意見を有し歴史の自然的時代区分は之を以て基礎とすべしと唱へ（註三）クラリツクもローレンツに倣つてか又は彼独自の意見が同様の之をいつてる（註三）。其他シエーレルの獨逸文學に於ける六百年週期說、ウイラモウイツ・メーレンドルフの古代史に於ける週期說などもある、しかし之等の諸家、殊にローレンツさへもこの觀察に深い理論上の基礎を置かず、又ローレンツもクラリツクも主要な區切り目を間違へてる。予はこのことに對して議論を進めるに當り、豫め問題の範圍を限局し曖昧な勝手な脱線を防いでおきたい。で先づ史的「發展」「史的「進歩」の出現する所謂「史的^{ヒストリシヨン}生活」とは抑々何か、またある時代に一定の「特徴」を與へ、特殊の「色彩」を附けるものは何か、大きに於ても（外部的）制度に於ても（内部

的)之が決定的要素は國家の交替であるか、宗教上觀念の變遷によるか、或は經濟制度、外的技術の變化か、または所謂文化の移動か。

蓋し、之は單獨に其の孰れのみでもなく、各自の若干づゝが結合したものであることはいふまでもなからう。この問題に對してランケは既に結論を與へてゐる、曰く「人類の永續的運動は大なる精神的諸傾向のうちに宿る、この諸傾向は人類を支配するものであつて各自の間に於ては或るものは特に卓越し、あるものは互に駢列する云々」。要するにランケは「世界精神」「世界理性」などいふ理論的に考へ出した觀念を指すのではなく、目立つて他に挺んじてる意志の方向、即ち捉へらる實在的なものを指すのである。但、何物がこの意志の方向を決定するかに關し吾々はランケの所説に補遺を加へる必要がある。予はこのものを二群に分けたいと思ふ。一は多く外的物質的或は生長的經

濟的他はむしろ精神的唯心的群である。トルルチの言つてるやうに經濟的要素を重要視し力説したマルクス派の史觀の功績は認めなければならぬがしかしこの派の流を汲む史學は經濟的要素を餘りに重要視過ぎる、さればといつてシェーフエルの如く之を輕視するも當らない。經濟は廣義の地理的事情(氣候、地勢、農工業的地質、交通狀態をも含む)並に人類學的要素(殊に人口密度)人種的能力體力、健康及び民族の經濟的意志によつて決定される、一般に經濟様式はこの割合に安定な決定要素に依つて除々に變化する、其の變化の主因は人口の増加と交通狀態の變動である、特殊の事情が加はらないところでは史的生活上經濟は保守的といひうる、この特殊な事情は可なり多く、氣候や地勢の關係から起る凶作、人口の過剩惡疫、戰爭等を擧げることが出來よう。

第二の群は人間の意志の方向であつて意識的な

ると本能的なるを問はず、より多く精神的であり、自我の主張、勢力の擴大、即ち防禦及侵略の爲に團體形成を目的とするものである。予はこゝにヤコブ・ブルクハルトの擧げた史的生活上重要な三つの勢力即ち國家宗教文化に就いて論じよう、彼は國家と宗教を「第二群」中の固定した勢力といつて予も同感であつて更に之を固定した意志の形式と附言したい。政治上宗教上の意志の力は生長的經濟的意志の方よりも其の企劃努力傾向を變更することが遙に迅速である、何故ならばこのものは矢張り外界との聯絡があるけれども精神力は經濟力と比較すればより自由な運動能力を有するからである。この點に於て文化は更に一層自由だといひうる、文化は捉へ難い、而も實在する何物かであつて予はこのことに關してもブルクハルトと同意見である。^(註四)即ち文化を次の如き精神の發展の總和と見る、其の發展とは自發的

に起り一般的價值又は強制的價值を要求せざるものである、文化は絶えず變化し分解し二つの安定的な生活方向(國家と宗教)に働く、但國家と宗教が文化を使役し其の目的の爲にある制限を加へる場合を除く、然らざるとき文化はこの二者の批評であり、時を報する時計である、そこには形式も内容も皆掩はるゝことなく如實に暴露されるからである。更に文化は無數多形の作用であつてこの作用により民族特有の潜在的能力が實現の可能性を帯び其の最後最高の時期即ち科學と哲學に於て其の眞個の相を現はす。

扱吾々は斯くして人類の意欲衝動の段階を知つた、然らば何物がこの意志方向の主體であるかを想ひ浮べるならば意欲の全體の活動が明かになる筈だ。ランケはよく人類、時代などの語を用いて、しかし察するに彼は先社會上指導的階級を指してゐるやうである。このことは肝要な點だと思ふ。

民衆が指導的意志の方向に全く無關心だといふのではなくして民衆が却て指導階級の活動に缺くべからざる補充であり基礎である。そこで問題は次のやうになる。下層即ち民衆は其の民族特有の生長的生活意志を最直接に最眞率に表現し其の民族精神に相當して信じ且行動するが特に彼等は最切實に經濟的急迫要求を感じる、この民衆の急迫要求が指導階級を動かし政治上宗教上意志をある一定の方向に導く。若し上下兩階級の關係を理解せんとするならばこの異常な急迫即ち精神苦を明かにしなければならぬ、此精神苦こそ最貴く高尚な精神を民衆と共に感ずるところのものである。指導的人格及び階級はこの急迫を癒し又は多數民衆の意志即ち表現し兼ねてゐる民衆精神を代表して體現しなければならぬのであるがこの場合に彼等は太なる障礙に遭遇する、何となれば指導的階級には其の背景にそれ相當の多數者が控へて居つて從

來行ひ來つた政治上宗教上或は文化上の方向を善くないと考へ之を維持せんとするからである。だから上述の指導的意志の方向といふのは指導的人士によつて新時代の曲調が一齊に吹奏されると解してはならぬ。上流に於て「新」の選手があると同時に「舊」の擁立者もある、歴史を通じて保守派と自由派(進歩派)とは必相伴ふ、歴史家は普通、結局勝利を得た新しい意志の方向の支持者に道德的權利を與へるが新派必ずしも常に貴い者無垢な者とは限らぬ。が兎に角新派舊派の争闘は史的生活の基礎的事實である、舊派が一時勝利を得た時でも尙新派即ち時代に特色をつける意志の方向は明に認められる、もし新派が勝利を博したとすると文化殊に哲學的文學的反映は現實性を帯び勝利を得た意志の方向から一の理論を作り上げる、此理論には多少の差はあるが一般的妥當性と同事に獨斷的特徴が附加せられる。反對派は之に批評を加へる、

しかし最鋭敏な批評は有形的經濟的政治的事實に行はれる。新理論は時代の急迫を救済すると約束した、しかし永久的に救済することは不可能である、そこで懷疑が起り新理論の獨斷を打破し指導的勢力を崩壊せしめようとする、この批評及懷疑から新しい理論が作られ之がまた思索的な責任觀の深い人士を動かし新しい行動に刺戟を與へる。

そこで吾々は民族的人口的地理的經濟的事實から文化的反映に、また文化的反映から實際的行動に、其の實際的行動の結果は又反映する理論に影響するといふ絶えざる移行關係を知つた。他方に於て獨斷的理論は上から下へと滴下し遂には民衆の間に浸潤し其の影響十分になれば行動となる、革命は其の例である。一體下層は意志の方向に於て指導階級よりも一二代遅れる、例へば十八世紀末葉に於ける啓蒙思想中、世界公民主義の如きは漸次市民階級を通じて下降し十九—二十世紀の交

に初めて無産階級の共有物となつた、無産階級は指導階級及中流階級にあつては既に久しく普及してゐる反映、傾向の裡に没頭してゐるから指導的人士及階級の意志方向は下層人民の意志方向とは反對になつてゐることがある。従てある時代に指導的人格によつて烈しく論争された理想が次の時代になり初めて民衆に影響することは珍らしくない。

ランケは人間の唯一の活動方法を唯一の本質的のものを見ることに反對し、むしろ種々の勢力の間に絶えず交互の作用の存在することを論じてゐるのは當つてゐる。ランケ曰く「この諸傾向のうち常に一つの定まつた特殊の方向がありこのものが特に卓越して作用し他のものは後退する、例へば十六世紀の後半では宗教上要素が卓越して文學的要素は壓倒され、之に反して十八世紀では實用的勢力が勢力を恣にし藝術及之に類するもの活動は退いて居つた。歴史家は先、ある時代に人は如

何に考へ、生活したかを觀察しなければならぬ。

そうすれば道徳的原理の如く永久に變化なきものは別として各時代には各々特有の傾向、特有の理想を有することが發見される云々。(註五)

吾々はこの變化に於てある法則の存在を知る。下層の民衆は

人種的特性及び經濟上の急迫に最密接な關係がある、彼等の意志は遲鈍で除々に動く、謂はゞ彼等

は史上の交響樂に於て主低音を奏す、そして主

譜テンデメロアー調を與ふるものは指導階級であり、顛音トリレルに當るものは文學的哲學的反映、及造形美術である。

但この樂目メロデーに對して反對樂目がある、このものは

次で主樂目となる、今日の保守派は明日の進歩派となり或は其の反對もあらう、又演奏の新しい方法が現はれて管弦樂の一切の調子を支配するかも知れぬ。一觀念も同様であつてある孤獨な思想家

の腦裡に産れ最初は恐らく好專家の話題たるに過ぎなかつたものが遂には革命擾亂に際會し一時代

を支配することもある。

そこで以上を要約するに一時代の特徴は指導階級の政治上宗教上或は往々文化上の意志の方向によつて形成せられ、其の意志の方向は主に下層民衆の要求衝動によつて鼓舞促進され、そして文學的哲學的反映たる理論によつて準備され變化せられる。一方にまた經濟上發展の段階は史的時代を特色づける特殊のものではない、何となれば經濟状態は一般に執拗なもので除々に發展する、宗教上政治上の衝動は經濟上の状態と密接な關係を有し、其の共同作用によつて發生するに拘はらず經濟關係が實際上主譜調の役をつとめることは至つて稀である。

吾々は時代の特色を分析し之を経験的に考察した、そこで三百年毎に規則的に反覆する史的生活の特徴と之を結合して觀察する。週期的循環は熱烈な指導者の新しい意志方向が發現した時に初ま

る、第一の百年ではあらゆる方向にこの意志の方向が及ぶ、即ち實際的改革の時代である、大膽に躊躇せず突進する時代である、次の百年になると熱情的改革の精神闘争の精神に勢力維持の精神が代る、即ち争鬭の精神が後退して調和的沈思的精神が出現さる、約言すれば豊熟の状態になる、このものは好條件の下に在つては第三の百年に續くそして漸次晩熟或は更に過熟の状態を呈する、一定の觀念が固定し久しきに及べば緊張を缺き遂には道德的弛緩の状態に陥る、そこで反對派の批評が起る、其まゝ來る急迫、民衆の不滿は如何ともし難く從來の意志方向と事實上の急迫、民衆の要求との間に調和を失ひ、失望落膽の感情は他の意志の方向に氣勢を添へる、そして復争鬭となる、こゝに新しい意志の潮流が勃發する、かやうにして一つの週期が完結し、更に新しい循環に移り行く。

この週期を基礎として時代區分を試みるならば左記の如く八時代（紀元前六〇〇年から紀元後千九百年まで）に分けることが出来る。從來の區分法たる古代中世近世などいふのは何等の理論的根據もないのであるが尙一般に適用する所以のものは其の用語が甚便利だからである、そこで新區分法による各々の時代にもそれ々の名稱を附けることが必要であらう。

- 一、紀元前六〇〇—三〇〇 古代民族文化時代
(或は古典時代)
- 二、同 三〇〇—一 へレニズム時代
- 三、紀元後 一—三〇〇 羅馬帝政時代
- 四、同 三〇〇—七〇〇 民族大移動時代
- 五、同 七〇〇—一〇〇〇 西方帝政時代
(或はカロリナ時代)
- 六、同 一〇〇〇—一三〇〇 神國時代
- 七、同 一三〇〇—一六〇〇 ルネッサンス時代

八、同 一六〇〇—一九〇〇 自由主義時代

(或は歐洲均衡時代)

尙近世 (Neuzelt) なるものは最近の時代即ち一九〇〇以後或は一九一四以後の時代に局限すべきものであらう。

以上に説いて來たところを約言すれば次のやうになる。

一、史上の時代を區分するに當り歴史の潮流其のものうちに客觀的に立證しうる個々の時代が存在する。

二、時代の特徴はある文化圏の指導社會に於ける指導的意志の方向に存在する、其の意志方向は政治上宗教上生活並に藝術哲學に表現される、經濟上の發展はそれ特有の地理的有形的關係に基く傾向及狀態を示す、指導的意志の方向に對して常に有ゆる、或は部分的に指導的地位をためる反對の潮流又は潛行の潮流がある、このものは其の

後に至つて初めて表面に現はれて來る。

三、第四—七世紀に於て史的團體となつた西方文化圏には第八世紀以後上述の意志の方向が三百年毎に週期的に循環して存在することを證明しうる。

四、週期といふ語は以前から史的經過の上に用いられた、しかし同等の期間の時期、即ち自然科學的週期に着目したものはなかつた、またコーレンツやクラリツクが三百年の時期の連續を想ひ浮べたに拘はらず其の理由は原則的深刻を缺き且其の區切り目を誤つてゐる。

五、三百年の期間に於て意志の方向には展開、成熟、分解の三期がある、從て各々の百年は事實的改革的時期、思想的調和的時期、並に問題的時期に分れる。

六、週期には外來的な往々突發的な人口の移動によつて遲延または停止が起る。

七、かやうな史觀を集合的或は總體的といつてよろしい、何故ならば重きを其の全體におくからである。但、偉大なる史的人格即ち英雄を有機的に其の全體の經過中に挿入し、そして彼等に其個人的權利を與へることは出来る。

八、誤謬に陥り易い中世其の他の概念を漸次に放棄する爲にはこの三百年の週期に基づいた時代の命名法を慣用するやうにお奨めしたい。

- (一) O. Hertwig, Der Staat als Organismus, 1922
- (二) O. Lorenz, Geschichtswissenschaft I, 292f.
- (三) R. v. Krahl, Weltgeschichte nach Menschenalter
- (四) J. Burkhart, Weltgeschichte, Betrachtungen, S. 56
- (五) Ranke, Epochen d. neueren Geschichte, S. 16, 17